

第3章 馬

寺嶋 優駿

3.1 馬と日高

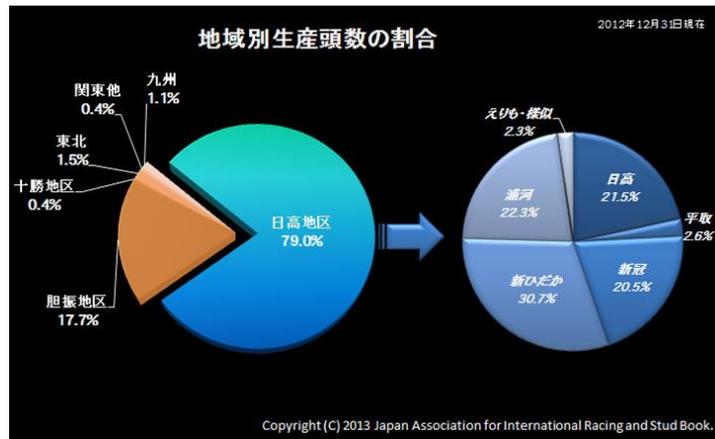
日高は、北海道の中では気候も温暖で雪も少ない地域である。また、濃霧発生地帯であり、火山灰地が厚く被覆している。そのため、農業としては普通作目よりむしろ畜産に適しており、古くから馬産地として位置付けられてきた。

日高の馬産の起源は、江戸時代の駅馬の配置に始まるとされる。1858年には幕府が現在の浦河に馬牧を設置

した。馬牧は明治時代になって廃止されたが、収容馬約500頭は三石・浦河・様似などの民間人に貸与された。その後、1872年には、小型馬を大型化して広い用役に適応する改良を認めた当時の開拓使・黒田清隆によって「新冠牧場」が開設された。新冠・静内にまたがる約6700町歩のその土地にはミヤコザサなどの野草が繁茂しており、放牧にも好都合だったのである。新冠牧場が整うまでに約16年を要しているが、この間に大きな役割を果たしたのが、開拓使雇いのアメリカ人、エドウィン・ダンである。新冠牧場は彼の設計による近代的な西洋式牧場であった。厩舎・官舎・見回舎・牧柵などの施設をはじめ、静内方面に広大な飼料畑を開墾するなど、北海道馬産政策の拠点として整備した。また、馬に深刻な被害をもたらしていた北海道狼を駆除したのもダンであった。

1882年に開拓使が廃止となると、新冠牧場は1884年に御料牧場となった。御料牧場の目的は、西洋文化にならって皇室が行幸の際に馬車を利用するための馬の生産であり、また、交通運搬手段、農耕用に使う大型馬匹の需要に応えるためであった。3年後にはこの牧場にサラブレッド種が輸入され、日高地方の軽種馬生産に大きな影響を与えた。その後1905年に馬政局が発表した第一次馬政計画ではサラブレッドを中心とする乗用馬の生産が奨励され、1907年には第一次馬政計画を推進するために農林省が浦河町に日高種馬牧場を建設した。ただしこの時期の日高振興局の農業の中心はあくまでも農作物であって馬の生産はさほど盛んではなく、馬産地としての評価は東北地方、関東地方、九州地方の方が高かった。

図 3-1 地域別馬の生産頭数の割合



出所：日高振興局 HP

第一次世界大戦以降は、軍馬の育成に力が入られ、この時期にはアングロノルマン系中間種の小挽馬の飼育が多かったのである。当時、府県の投資家や企業家は、北海道の土地に対する投資欲が高かったことから、これらの投資家が牧場経営に参画することとなった。生産物の搬出搬入や生活必需品の運搬などには馬は欠くことのできない重要な輸送手段であった。やがて開拓が進み、耕地面積が拡大していくにつれて、農耕馬としての需要はますます高まっていきつたとみられる。長い間下落を続けた馬価格も日中事変勃発により軍馬需要は急増し、価格も高騰したことから、馬生産者は軍用向けの生産に大きく傾斜せざるをえなかった。

戦後になると、明治期から農耕や運搬に使用されてきた中間種やペル系種の農用馬は1960年代頃から耕運機などの導入による機械化により農用馬としての役割に終わりを告げ、農家の保有数及びその数は急速に減少していった。敗戦と同時に将来を絶望し、戦前には高く売れたサラブレッドであっても飼養頭数の多くを手放し、繁殖牝馬の入手が極めて困難を来たした。やがて、軽種馬の増加が見られ、急速に育成され始めたのである。1970年に減反政策が開始され、その後まもなく第一次競馬ブームが起これば、それまで零細な規模で稲作を行っていた農家の多くが水田を牧草地に転作し、競走馬の生産を行うようになった。一方、戦前に軍馬や農業馬の産地として有名であった他の馬産地は宅地開発や土地高騰の影響による牧場用地の確保困難や、馬産の大部分を占めていた軍馬・農耕馬の需要の消滅によって衰退した。日高振興局における農業生産額に占める競走馬の割合は1965年には22%であったが、1970年には63%に上昇し、それ以降60～70%を維持し続けている。

3.2 競走馬

3.2.1 競走馬の概要

競馬の黎明期においては競走馬という専門的な品種は存在せず、日常的に乗用馬や農耕馬として用いられていた馬が競馬に出走していたが、やがて競馬が専門化すると競走用の馬種が模索されることとなった。イギリスではアラブ種を改良したサラブレッドを普及させ、現在世界各国の平地競走や障害競走ではサラブレッドが主流となっている。また、ばんえい競馬では、ペルシュロンなどの大型馬（重種馬）、繋駕速歩競走ではスタンダードブレッドが用いられている。以下の表はそれぞれの馬の特徴をまとめたものである。

表 3-1 競走馬の特徴

サラブレッド	ペルシュロン	スタンダードブレッド
		
平地競争・障害競走	ばんえい競馬	繋駕速歩競走
体高は 160~170cm ほど、体重は 450-500kg が標準的である。頭は小さく、四肢は長く、胸や臀部の筋肉は発達している。ケガをしやすく、物音や閃光に弱いなど、肉体的・精神的にデリケートである。	足が短く、胴が太い。体高は 160-170cm で大きなものでは 2m を超える。体重は 1t にもなる。性格はおとなしく鈍重だが、非常に力が強い。その強い力を生かし、馬車馬、挽馬、ショーなどに使われる。	体高が 160cm 付近、体重は 450kg 程度が標準的である。サラブレッドより丈夫で、少しがっしりとした体格をもち、体が長く足が短い。性質もサラブレッドよりは温厚で扱いやすいとされる。

出所：Wikipedia より筆者作成

3.2.2 競走馬の一生

競走馬の一生は以下のとおりである。

①種付け

種付けとは種牡馬と繁殖牝馬を交配させ、繁殖牝馬を妊娠させること。一般に、毎年春に起こる牝馬の発情にあわせて行われる。

②出産・離乳

馬の妊娠期間は約 330 日である。出産時期は 2・6 月ころである。生まれた仔馬は出産から約 6 ヶ月で母馬から強制的に引き離される。これを離乳という。母馬から仔馬を引き離す方法は牧場によってさまざまだが、一時的なものとはいえ離乳により母馬・仔馬の双方が受けるストレスは少なくない。

③馴致

競走馬として扱われることに馬を慣れさせることを馴致という。もっとも初歩的な馴致は人間の存在に慣れさせることであり、これは一般に牧場で行われる。1 歳になると馬具の装着に慣れさせることに始まり、最終的には人間が騎乗することに慣れさせる。

④育成

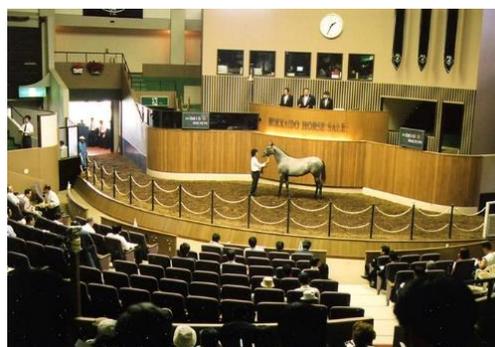
厩舎に入る前の仔馬に対し、競走馬としての基礎的なトレーニングを積ませることを育成という。狭義の育成は 1 歳後半から 2 歳の前半にかけて育成牧場で行われる騎乗馴致、騎乗訓練、調教を指す。広義の育成は誕生から離乳までの間にある仔馬に対して人とのスキ

ンシップに慣れさせるプロセスと、当歳の終わりから 1 歳の後半にかけて行われる人とのスキンシップに慣れさせつつ行われる初期の騎乗馴致を含む。中期育成の段階で昼夜放牧やセリ馴致（駐立や挙肢などセリ市での望ましい振る舞いを仔馬に覚えさせること）をおこなう。

⑤馬主による購入

競走馬用の馬は当初は生産者が所有するが、やがて馬主によって購入される。一般的な時期は生まれた直後から 2 歳にかけてである。購入方法はセリ市による場合と、生産者と馬主の直接取引による場合とがある。欧米ではセリ市での取引が主流である。馬によっては引き続き生産者自身が馬主となり、競走に出走させる場合もある。購入に関しては馬主や生産者と関係が深い調教師や家畜商が仲介する場合も多い。

図 3-2 セリ市の様子



出所：馬の一生をたどる

⑥競走馬登録・入厩

競走馬として登録され、デビューに備えて管理にあたる調教師の厩舎（トレーニングセンター）に預けられる。入厩の時期は一般に 2 歳の春から夏にかけてである。なお、競走に出走するまでに競走馬名が決定する。

⑦競走生活

日本においては 2 歳の春（4 月-7 月頃）以降、競走に出走することとなる。なお、出走に際してはゲート発走検査など、競走馬としての基本的な能力を確認する検査があり、事前にこれに合格した馬のみが出走可能となる。逆に、驚異的な潜在能力の高さで話題になるほどの馬であっても、ゲートを嫌がるなどして発走検査を何度繰り返しても受からず、ついに競走馬としてデビューできなかったケースも存在する。地方競馬の場合、新馬は「能力試験」、転入馬、休み明けの馬は「調教試験」として実際にレースと同様に走行して、問題なく発走・走行ができるか、一定の距離を定められた時間設定の範囲内で走る能力があるかも確認される。一定の期間は出走経験のない競走馬のみが出走することのできる競走（新馬戦）が主催者によって用意されるが、日本以外では新馬戦という競走ではなく未勝利戦と呼ばれる未勝利馬による競走が一般的である。競走生活は一般的に 5 歳前後まで続く。なお、競走を重ねるにつれて、個々の競走馬の能力や適性が次第に明らかになる。

図 3-3 能力試験の様子



出所：雄一の競馬ブログ

⑧競走馬（牡馬）の去勢

オスの競走馬（牡馬）について、競走時に興奮しやすい難点を抱え、これが競走能力を妨げていると判断された場合、気性を穏やかにし、能力を発揮しやすくするために去勢がなされることがある。この去勢された牡馬はせん馬として区別される。去勢によって能力が開花する馬も多く見られるが、一方で去勢によって繁殖能力を喪失するため、競走の主目的として優秀な繁殖馬の選定を謳っているクラシックなどの一部の重要な競走について、出走権が無いという制限がある。

⑨競走生活からの引退

競走馬が引退する時期については、種牡馬や繁殖牝馬としての期待の大きさや健康状態、馬主の意向などさまざまな要因が作用する。なお、現在の日本においては、競走生活を引退した後に種牡馬または繁殖牝馬として産駒を生み出した馬が、再び競走馬となることはできない競走生活を引退した馬のその後の用途としては、種牡馬や繁殖牝馬、競馬場の誘導馬、馬術競技、乗馬、競走馬の育成や、農業系学科の教育機関（高校・大学）の実習などに従事する使役馬などの選択肢があり、この他単に馬主の飼育馬、生産牧場などで功労馬として飼われる場合もある。また、乗馬の一部であるが、相馬野馬追（相馬市）の様な伝統的な馬事文化が存在する地域や草競馬が盛んな地域では、これに参加することを目的とした個人に繋養される馬も少なからず見られるが、この多くも元競走馬である。

3.2.3 競走馬の悲惨な末路

競走馬の一生については前述のとおりであるが、競争に出る前の段階のレースに敗れた馬や、レースを全うし、引退しても上記の環境に適応できなかった馬の末路は悲惨なものである。競馬業界で一生懸命に走ってくれた多くの馬には、屠殺場送りという恐ろしい末路が待っている。長年の人間による使役や虐待の末、ほとんどの競走馬は、売却要求競馬で安く売り飛ばされることになる。馬主は、馬が金を稼げなくなると、商品のように馬を売買するのである。馬たちは、「ミートマン」によって直接競馬場から回収される。毎年、10万頭のアメリカの馬がトラックでメキシコやカナダの屠殺場に輸送されるが、そのうちの12000頭がサラブレッドの競走馬であった。その他の馬は、競馬や繁殖用に出荷されるが、彼らも最終的にはドッグフードにされる。かつてスターだった馬も例外ではない。これらの馬の最後の数分間は悲惨なものである。PETA（動物の倫理的扱いを求める人々の会）の調査員は、日本最大の馬の屠殺場である熊本食肉センター内部でビデオを撮影した。サラブレッドは屠殺の直前に水をかけられ、屠殺室にいれられる。作業者は金属棒で足を殴って、馬を屠殺の位置につかせる。恐怖で混乱した馬はパニックになり、端綱を抜けて逃げようとするが、すぐに捕まり、数分後にボルトショットを頭に打ち込まれて殺される。日本とアメリカの繁殖業界のせいで、馬の数が過剰に膨れ上がり、不要になった「余剰」競走馬が屠殺場送りになるという状況に直接つながっている。屠殺場送りになる馬の数を減らすには、繁殖を緊急に規制する必要がある。

3.3 日高管内の馬関係の施設

3.3.1 日高育成牧場

日高育成牧場では主要な業務として、サラブレッド若馬の育成調教を行っている。JRA が市場で購買した 1 歳馬は夏に入厩後、昼夜放牧を経て、初秋から騎乗馴致が開始される。そして 1 歳の秋から翌年の春にかけて、先進の育成研究理論に基づく育成・調教により十分に鍛錬された若馬は、2 歳の春に売却され、競走馬になる。日高育成牧場では、欧米の育成技術や様々なスポーツ科学理論を積極的に取り入れながら、日本の気候、風土に適した若馬の育成調教方法の確立を目指している。また、この施設では馬と人が一緒に楽しむユニークなイベントが四季折々に催されている。表 3-2 はそれをまとめたものである。

表 3-2 日高育成牧場のイベント

シンザンフェスティバル	町民乗馬大会	浦河競馬
 <p>五冠馬シンザン号の名を冠するフェスティバルで馬上結婚式は、この祭りのメインイベントとして知られている。</p>	 <p>春は日高育成牧場、秋は浦河町乗馬公園と年 2 回開催されており、初心者から上級者まで、地元の青少年や乗馬愛好者が参加する。</p>	 <p>浦河町軽種馬生産振興会青年部の主催による草競馬で、地元牧場の人々により毎年白熱した馬の追いくらべが見られる。</p>

出所：日高育成牧場 HP より筆者作成

3.3.2 馬事資料館

競走馬の生産を主要産業とする浦河の町において馬関係の資料の収集保管と展示したのが馬の博物館、馬事資料館である。32 頭の馬をモチーフにして作られた優駿の門をくぐって右に曲がった先に馬事資料館があり、中にはドサンコとサラブレッドを比較した全身骨格やヒンドスタン号の剥製、迎賓馬車、史上初の五冠馬シンザン号の関連グッズ、蹄鉄、鞍、あぶみなどが展示されている。他にも競走馬に関す

図 3-4 馬事資料館・優駿の門



撮影者：馬事資料館係員

る資料や有名レースのビデオなども上映されており、競走馬を中心とした馬の資料が多く展示されている。馬事資料館の隣には 1975 年に廃校となった旧浦河東小学校の校舎を利用した浦河町郷土資料館もあり、浦河の動物や歴史、生活、漁業、農業などを数多くの資料で紹介・説明している。

参照 HP

- ・ Wikipedia

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%A1%E3%82%A4%E3%83%B3%E3%83%9A%E3%83%BC%E3%82%B8>

- ・ 馬の一生をたどる

[http://keiba-](http://keiba-beginner.com/)

[beginner.com/%E7%AB%B6%E9%A6%AC%E5%9F%BA%E7%A4%8E%E8%AC%9B%E5%BA%A7%E7%AB%B6%E4%BA%89%E9%A6%AC%E3%81%AE%E4%B8%80%E7%94%9F/](http://keiba-beginner.com/%E7%AB%B6%E9%A6%AC%E5%9F%BA%E7%A4%8E%E8%AC%9B%E5%BA%A7%E7%AB%B6%E4%BA%89%E9%A6%AC%E3%81%AE%E4%B8%80%E7%94%9F/)

- ・ 馬事資料館 HP

<https://www.town.urakawa.hokkaido.jp/sports-culture/museum/baji-museum/>

- ・ 日高育成牧場 HP

<http://jra.jp/hidaka/>

- ・ 日高振興局 HP

<http://www.hidaka.pref.hokkaido.lg.jp/>

- ・ 雄一の競馬ブログ

<http://ameblo.jp/youichikeiba/>